

レベリング厨、虐待として通報される

柳カエル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

有名なポケモンの世界に転生した主人公。強くてニューゲームだった……はず。

※9／6／10：46更新 『脱獄犯（3話目）』追加。お気に入り・しおり・評価・感想ありがとうございます。読んでくださって、ありがとうございます。個別の返信は控えておりますが、感想欄から案を採用いたしました。

目次

レベリング厨、虐待として通報される	1
後日談	3
脱獄犯	5

レベリング厨、虐待として通報される

「ちよつと、通報があつたんですがねえ……おたくがポケモンを虐待しているトレーナーで間違いない？」

「ええっ!? 誤解ですっ!?!」

このトレーナーで間違いない、と警察官の中では確定事項のようだ。

困ったことになったと容疑をかけられたトレーナーは頭を掻く。

なにを隠そう、ポケモンがボロボロになっても戦わせるこの虐待トレーナーは、転生者であつた。ゲームという媒体でポケモンを知つていて、強くてニューゲームである春意込んでいた。

「はあ。でもねえ。どう見てもねえ。おたくのポケモンさん、弱つてるでしょ? それにねえ。誤魔化さそうとしても無駄、無駄。ポケモンセンターに寄る回数が異常だつて、通報受けてるんですよ」

それだつて、ゲームでは何往復しようが問題はなかつた。一度だつて、瀕死の状態にさせたことはない。瀕死になるまで戦わせるのはかわいそうだから、瀕死にならないように必死に戦わせた。

「しかもねえ。育て屋さんからも、通報があつてねえ。タマゴから生まれたポケモンが行方不明になつて……。おかしいですよねえ。タマゴから生まれたポケモン、どこにやつたんですか?」

ゲームでは、いくら逃がしてもお咎めはなかつた。いつまで経つても完璧な子供を生まない親が悪い。捨てたんじやない。逃がしたんだ。それでも優秀なポケモンが野に放たれるんだから、嬉しいだろう。

「そういうの、困るんですよねえ。せめて、公共の機関に相談してくれないと……。しかも、あなた。もう大人ですよねえ」

前世では……まだ子供の内に入るはずだ。年齢のことまで言及される覚えはない。そういう大人こそ、ポケモンバトルで年下に負けることを恥じるべきだ。

「はあ……。とりあえず、話は署で聞かせていただきますから。逃げないでくださいね」

逃げる理由がない。最強のポケモントレーナーがこんな警察官に負けるわけがないのだから。

「あ。今回は、チャンピオンにもご協力いただいていますので、逃げない方があなたのためですよ?」

ゲームでは友好的だったはず。念願のポケモンバトルをした後になぜあんなに口撃されたのか、今でも分からない。負け犬の遠吠えだと聞き流したはずだった。

なんであんなに言われなくてはいけないのか。それらが頭を悩ませていた。自分は特別で。生まれながらの勝者で。みじめな気持ちにさせられるのはおかしい。

警察官から話の続きを聞きたくないのに、地につけた足は立ち止まっていた。

「あなた、チャンピオンからこう言われたそうですね。『ポケモンバトルをゲームと勘違いしている子供』だと」

だって……ポケモンは――

この世界は――

「ゲームじゃないんですか?」

後日談

『……深夜一時通報がありました、ポケモンを虐待していた容疑で△歳のトレーナーが逮捕されました。容疑者は「やっていない」と容疑を否認しており……』

ニユースキャスターの口から、次々と残虐な手口が公表されていく。誰がどう見ても「やっていない」と答えるだろう。

テレビを眺めている自身もその一人だ。

昔なら、ここまで赤裸々に暴かれることはなかった。

昔なら、それぐらい誰でもやっていたし、こっそりとみんなやってきた。今回の大捕物に協力した英雄だつて怪しい。

強いトレーナーほど、白とは言い切れなくなる。

いつからか、強いトレーナーは憧れから批判の的に変わっていた。ポケモンにバトルを押し付けていることから、目を背けて。

日付が変わって、虐待のニユースが香ばしくなってきた。コメントーターも生き生きとします。

『瀕死になるギリギリまで戦わせるなんてありえません！ 普通なら、もっと余裕を持って戦わせるはずです！』

そう言っていたコメントーターはいつかの番組で、ポケモンの対戦で惨敗して、手持ちポケモンを全員瀕死に追い込んでいた。降参することはプライドが許さなかったのだろう。

『うーん。もしかしたら、そのトレーナーにも事情があったのでは……？』

もう一人は容疑者を擁護すると見せかけて、家庭環境や出生を好き放題暴露し始める。暴露した自身は職業と出身校しか明かしていないというのに。

罅が明かないと更にもう一人はインタビュウのVTRを流した。

『○○がそんなことするはずない！ あいつは誤解されやすいだけなんだ！ あいつはすごいんだ！ だから、逮捕することだけはやめて

ください！』

容疑者として逮捕されたトレーナーは意外と人望に恵まれていた。強いトレーナーに囲まれて、強くなっていったことが伺える。

ただ、そのトレーナーの周りにいた人間は全員、子供だった。大人からは忌避され、子供からは慕われる。そんな若者だった。

それを証明するかのように、インタビューされた大人はみな『何度も忠告した』と答えた。

その誰もがポケモンバトルをしたことがあった。

ポケモン同士で戦わせる残酷さを知らずに。

勝ち負けを気にしない時期があった。

負けることが許せなくなつて。

どんなポケモンでも愛しかつた。

見た目と能力が全てになつてしまつた。

そんな子供時代を過ごした大人たちは、やがてポケモン勝負から手を引いた。ポケモンを持つていても育てない。それが彼らの選択、愛だった。

育てるといふことは、勝ちにこだわるということ。それはつまり……エゴである。

だから、彼らのポケモンは弱い。子供に負けるほど弱い。何度負けても戦い方を変えない。変えられない。時の止まつてしまつたポケモンたち。

彼らに勝負を挑むのはかつての自分。負けると分かつていても逃げないのが、唯一残されたプライドであり。

唯一残された、償いアイのカタチの手段であつた――

脱獄犯

「んん……実に惜しい人材を亡くした……いや。今からでも手に入るか。素晴らしい……我が同志が。臆病な人間共とは上手くやっていけなくても、我々となら上手くやっていけそうだな」

真つ赤な「R」を背景に、オールバックの男性が黒革のソファに腰掛けた。彼の目に映るのは下らないことばかり騒ぐテレビ。

「チャンピオンを下した以上、実力も申し分ない。その野心も。幼稚さも。欲しいぞ……このトレーナーが」

彼にとって子供とは厄介この上なかった。天敵なのだ。単純でサカキ率いるロケット団を悪の組織だと決めつける。

悪の組織について、特に弁明はない。しかし、商売を邪魔されることだけは我慢ならなかった。この虐待トレーナーに恩を売り、まずは用心棒として悪の道に引きずり込んでやれば上手くいく。

そう。後先考えずどんどん成長していく子供をこちら側につければ。天敵も恐れるに足らず。

サカキにはそのような確信があった。

成長を止めた大人では、大した戦力にならないのだ。サカキだって全て分かって雇っている。切りやすいヤドンの尻尾はいくらあっても困らない。

「脱獄の準備が必要だな……」

墮落した転生者の前に垂らされた蜘蛛の糸は――

毒蜘蛛の糸だった。

こんなはずではなかった。そんなつもりではなかった。懺悔して
ももう遅い。

虐待として通報されたトレーナーは苦楽を共にしたポケモンたちと引き離され、留置場——檻の中で孤独感を味わっていた。

救いは掃除が行き届いていることだろうか。

ポケモンは強い。トレーナーは弱い。法律と倫理の前では無力でしかない。

当たり前のことにどうして気づかなかったのだろうか。歳の近いトレーナーたちは笑って許してくれていた。大人たちは……誰一人笑っていなかった。

いつも冷たい目でこちらを見ていた。懐かしむような目で。蔑むような目で。

今までどんな目で見られてきたのか。一人一人の目を思い出していた、その時。

声がした——

全てを諦めた大人の声だ。

『私なら助けられる。そんな所は似合わない。君にはもっとふさわしい場所がある。君の居場所はそこじゃない。私の元に来るといい』

監視カメラ越しに目が合った気がした。正体不明のスピーカーからはノイズ混じりで甘い言葉がにじり寄ってくる。声の通り薄々、勘づいてはいた。その言葉を待っていた。もっと早く見つけて欲しかった。

『ポケモン勝負を続けたいんだろう？ そう。君はもう子供じゃない。自分のポケモンを勝たせるためではなく、自分が勝つために、ポケモン勝負を続けてるんだ。そこに最早ポケモンの意思など関係ない』

転生者の理解者が現れた瞬間だった。

「ああ……」

やっと思淵が覗き返してくれたのだ。

『ポケモンは道具だ。誰がなんと言おうと道具だ。我々のために存在するのだ。どう扱おうが我々の勝手だ』

「そうだ……」

『君は一度社会に負けた。それがなんだ。そこからまたやり直せばいい』

いだけだ』

「また……」

目の前が真っ暗になって、ポケモンセンターに駆け込んだ時のように。ようやく元気になったポケモンと前を向いたあの時のように。

『情けは捨てろ。真の悪人になる時とは、ポケモン勝負に負けた時だ。私は誰もが認める悪党だ。だから、私は負けなくてはいけない。そう求められているからさ。意味が分かるか？ 大人になれば、いつか分かる日が来る』

子供でもない、大人でもない中途半端なポケモントレーナー。男の言う通り、トレーナーはまだ悪人でも善人でもなかった。

男はこのトレーナーを悪人として育てようとしている。それを分かった上で真の悪党に焦がれた。

『……とは言ったものの。強制しているわけではない。私の手を取るかどうかは君が決めるべきだ。君自身の意思で選んでこそ、意味がある。どうだ？ 今ならまだやり直せるぞ』

子供の時は毛嫌いしていた悪の親玉。正義感に駆られた若かりし頃。今はもう――

悪の組織を倒す意味が分からなかった。好きにすればいい。放っておけばいい。被害に遭うのはポケモンだけだ。もうトレーナーのポケモンは――否、努力の証は取り上げられてしまった。どっちが悪なんだ。

「やります。……行きます。あなたの元へ」

光を失った子供の瞳を直視したサカキは思わず、悪寒に体を震わせた。

「この子供……。もしかしたら、私の上に行くかもしれない……。恐ろしい……。なんて恐ろしいガキがいたものだ」

マイクから離れて洩らした声を拾う者はいない。

「ククク……。子供とはなんて単純で純粋な生き物なのだろうか。まるでポケモンだな。しかし……」

サカキの頭に伝説ポケモンがよぎる。

「コントロールを間違えれば、地獄に真つ逆さま……」

絨毯が汚れることなど気にせず、傾けたワイングラスから赤い液体がこぼれ落ちる。ゆっくり染みていく赤ワイン。

「ふはは……!! そうでなければ、世界征服など夢のまた夢よ! 私は諦めない……笑われようが……。全てのポケモンは私の物だ!」

ガラス張りの高層ビルから夜景を見下ろすサカキ。サカキはワイングラスを月と重なるように掲げた。

歪にねじ曲がる三日月。

それは――

歪んだ子供の夢のようであった。